様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２７２２

研究課題名（和文）福井三型アクセントの調査研究

研究課題名（英文）Research on three-pattern accent systems in Fukui Prefecture

研究代表者
新田　哲夫（NITTA, Tetsuo）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：９０１７２７２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：日本語のアクセントは大変バラエティーに富み、このなかでも「二型アクセント」と「三型アクセント」は「N型アクセント」と呼ばれ、特に「三型アクセント」は全国的に珍しいアクセント体系として研究者の注目を集めてきた。21世紀なって福井県でもその存在が発見され、この調査研究によって様々なタイプの「三型アクセント」を確認できた。異なる三型アクセントの記述とそれぞれの比較を通じて、共有する特徴と独自の特徴を明らかにした。また、地理的分布に関し「三型アクセント」が福井県沿岸部に集中して存在すること、その近接地域に「二型アクセント」があり、また「無型アクセント」に分断される場所があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語のアクセントは、種々の異なるアクセントが存在することは知られているが、この研究を通じて、この地方のアクセントが多様であることを示した。福井市周辺部は抑揚の少ない「無型アクセント」であることがわかっていたが、その周辺部は不明の部分が多かった。21世紀になって解明が進み、「三型アクセント」という珍しい体系が複数存在していることがわかってきた。この研究では、この「三型アクセント」にスポットをあて、バリエーションの種類や分布域などを明らかにした。豊富なバリエーションも近年の共通語化によって消滅しつつあり、方言アクセントの古い姿を記録として留めておこうとする社会的意義を有する研究である。

研究成果の概要（英文）：The principal investigator and assistant investigator have discovered various types of three-pattern accent systems exist in the coastal area of the northeast of Fukui Pref., although it was considered in previous studies that dialects in the area have only two accent patterns or they have no lexical distinction of accent. This research outlined accent systems of the some dialects (Kuriya, Kitagata, Antoh etc.) and describe the characteristics of each dialect. And comparisons between the dialects have revealed what characteristics are commonly shared and which ones are not.

研究分野：言語学

キーワード：三型アクセント　福井県のアクセント　N型アクセント　福井県安島方言

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本語のアクセントは大変バラエティーに富み、これまでのアクセント研究で種々の体系が解明されてきた。「無アクセント」を除く「有アクセント」は、「多型アクセント」と「N 型アクセント」に分けられ、このうち、「多型アクセント」はアクセント単位の長さが長くなると、対立する型の数が増えてゆくタイプである（上野善道 1989）。それに対して「N 型アクセント」は、「二型アクセント」（N=2）、「三型アクセント」（N=3）などの総称で、アクセント単位の長さが増えても、対立する型の数が N の値よりも増えないタイプの体系をいう（上野 1984, 1989, 2012）。「三型アクセント」とは、アクセント単位の長さが長くなっても原則 3 つの型しかない体系である。「N 型アクセント」の用語を確定した上野(1984)の段階では、「三型アクセント」体系として知られた分布域は、本土方言では島根県隠岐諸島（広戸惇・大原孝道 1953）が確実なものとして、琉球語では南琉球の与那国（平山輝男・中本正智 1964）がそれに該当すると目されるくらいであった。その後、北琉球の奄美諸島等でもいくつか点在的に発見されてはいたものの、最近になって、上野(2010)で与那国島の三型構造が明らかにされ、また宮古・八重山方言においても松森晶子(2010)の多良間島と五十嵐陽介他(2012)の池間島を皮切りに、次々と三型アクセントが発見されるようになった。南琉球が三型アクセントの一大“鉱脈”と目される事態に至っている。一方、それと時を同じくし、本研究の申請者新田が福井県越前地方に三型アクセントが存在することを報告し（新田 2012）、東京大学大学院生の松倉昴平が、福井県北部地域を中心に複数地点の三型アクセントを発見し報告している（松倉 2014ab)。本土方言では、三型アクセントの分布域は隠岐地方だけだと思われていたが、さらに東方にもまとまって存在することがわかり、福井県もまた三型アクセントの一つの鉱脈たる地域となったのである。本研究は福井県の三型アクセントを中心に、これまでの研究をさらに深化させようとするものである。

２．研究の目的

（1）これまで発見されている福井県越前町、南越前町各方言および坂井市三国町安島方言、あわら市の各方言の記述を進め、共時的・通時的研究を行うための各方言の資料整備を進める。

（2）上記の方言のアクセント付与に関わる単位（単語・文節・文）の研究を深め、アクセント単位を決定する原理を解明する。あわら市北潟、坂井市安島、越前町厨では、三型が実現するアクセントのドメインが異なることを明らかにした。特に越前町厨ではアクセント単位が文節の場合と文の場合がある。出現の条件を厳密化したい。また、三型の細かな記述が進んでいない方言（南越前町など）でも単位の問題を明らかにしていきたい。

（3）越前地方のおよび周辺地域の調査を行い、新たな三型の存在の有無を確認するとともに分布域の詳細を明らかにする。特に南越前町、坂井市・あわら市の調査、また、福井県に隣接する石川県加賀市南部等の調査を行うことによって、バリエーションの確定を目指す。

（4）これらの調査データをもとに三型アクセント成立の歴史を明らかにする。方言アクセントの音調型の比較、地理的分布、中央式アクセントとの対応、隠岐方言他の三型アクセントとの比較を通じて、福井三型アクセントの系譜とアクセント変化の推定、また多型と三型の歴史的な関係について仮説を提示する。

３．研究の方法

本研究は福井県の三型アクセントを中心とする調査研究であり、フィールドワークとデータ整理が研究の中心となる。年度ごとの研究期間を通じて、研究協力者（東京大学大学院生松倉昴平、現在日本学術振興会特別研究員（金沢大学））と共同調査を行い、福井県嶺北（越前）地方の各地と石川県加賀地方南部地域の現地調査に赴く。調査研究は、年度ごとに、調査票の作成、現地調査、研究機関に持ち帰ってのデータの整理、考察、再調査のルーティーンを繰り返す。音韻現象で中心的問題となるのは、アクセント単位の問題である。また上野（2013）で挙げられている「N 型アクセントの一般特性」に関連し、その特性の見直しを行う。さらに最終年度、研究成果の発表と報告書を刊行する。

４．研究成果

(1) 分布

福井県を中心とする本研究ならびに、新田、松倉のよる共同調査で明らかになった N 型アクセントの分布域は、以下の通りである。

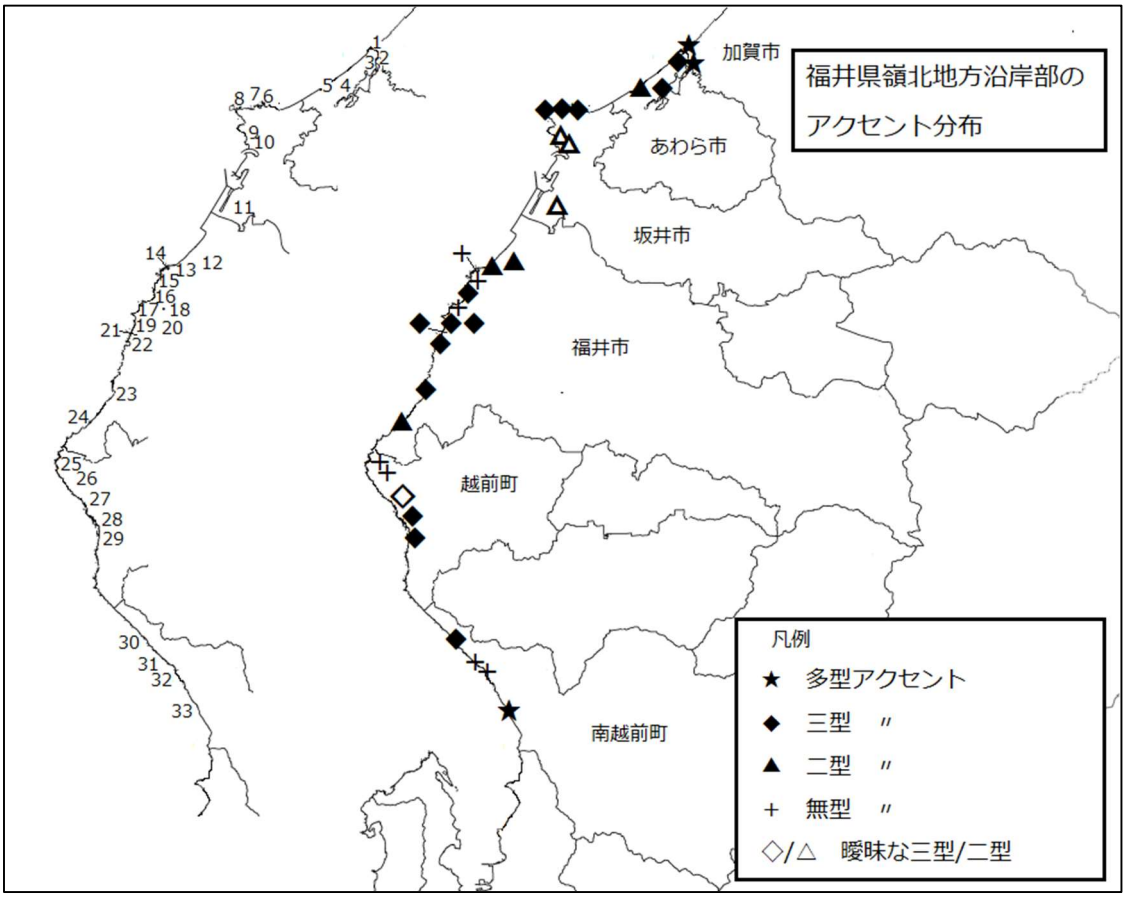
◆三型アクセント

３．あわら市浜坂、４．あわら市北潟、６．坂井市三国町梶、７．坂井市三国町崎、８．坂井市三国町安島、１６．福井市長橋町、１９．福井市鮎川町、２０．福井市国見町、２１．福井市白浜町、２２．福井市大丹生町、２３．福井市蒲生町、２８．越前町小樟、２９．越前町厨、３０．南越前町糠の 14 地点である（2020 年 3 月時点）。

（２７．越前町梅浦は、◇あいまいな三型アクセント）

▲二型アクセント（三国式アクセント）

５あわら市波松、９．坂井市三国町米ヶ脇、１０．坂井市三国町宿、１１．坂井市三国町米納津、１２．福井市浜別所町、１３．福井市浜住町、２４．福井市居倉町の７地点である。
（このうち９．坂井市三国町米ヶ脇、宿、米納津については、△あいまいな二型アクセント）
＋無型アクセント
１４．福井市和布町、１５．福井市蓑町、１７．福井市北菅生町、１８．福井市南菅生町、２５．越前町梨子ヶ平、２６．越前町血ヶ平、３１．南越前町甲楽城、３２．南越前町今泉



三型アクセントの分布は越前地方の海岸域に限られており、その隣接地に二型アクセントが分布し、三型二型の弁別的有アクセントを分断するように無型アクセントが見られる。

(2) 三型アクセントの共時体系と歴史的な対応関係

福井県沿岸部の三型アクセントの体系はバリエーションに富んでおり、沿岸南部の福井市蒲生、越前町小樟、南越前町糠は類似点が多いが、他方、北部のあわら市北潟、あわら市浜坂、坂井市三国町崎、三国町安島、福井市鮎川方言等では、音調の地域差が大きい。一部の方言を例に、音調の差が明確になる４拍以上の対応関係について音調型ごとにまとめると次のようになる。

	4拍文節の音調	小樟、蒲生	浜坂	三国町崎
②型	○[○]○○	C型（窓、畑…）	A型（箱、魚…）	A型（箱、魚…）
－②型	○[○○]○	A型（箱、魚…）	C型（窓、畑…）	B型（山、心…）
０型	○[○○○	B型（山、心…）	B型（山、心…）	C型（窓、畑…）

ただし、対応する音調型が多様であっても、対応する語群（類別語彙の所属）は例外がすくなく、明瞭な姿をしており、中央語アクセントとの関係も（類別の例外となる語も一致することが多く）明らかである。

三型諸方言

1拍名詞：1類／2類／3類　　（A型／B型／C型）
2拍名詞：1類／2･3類／4･5類　　（A型／B型／C型）
3拍名詞：1･4類／3･5類／6･7類　　（A型／B型／C型）（2類はまとまりなし）

(3) 安島方言の音声資料

福井県坂井市三国町安島方言は三型アクセントを有するが、それと並んで、maffa「枕」、jabberu「破れる」、ssaN「知らない」、はすれる hadderu「外れる」など、本土方言ではめずらしい重子音をもっている。この方言のこの種の音声と現地話者による発音の様子を記録したを動画資料作成した。動画には生え抜き女性話者３名の発音が収録され、安島地区内の重子音の出現に地域差があることも明らかにしている。

(4) 他の三型アクセントとの比較

福井県の三型アクセントと同じ三型アクセントを有する南琉球宮古語多良間方言との比較研究を行った。多良間方言の重子音の出現に関しては、福井県安島方言と共通する特徴を有するが、そのアクセント体系は本土方言とは全く異なる性質を有する。多良間方言のアクセントは、(a)「韻律語」という独特の韻律単位を有する、(b)「アクセント低核」を有する、(c)名詞句の主要部に常に核がおかれるという統語的核付与の現象があるなど、特徴的な性質が明らかになった。また、これらの性質は上野（1984, 2012）で挙げられたＮ型アクセントの一般特性にもない性質で、今後、統合的なＮ型アクセントの性質について更なる議論が必要であろう。

引用文献

五十嵐陽介・田窪行則・林由華・ペラール トマ・久保智之（2012）「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(1), 134-148. ／上野善道（1984）「Ｎ型アクセントの一般特性について」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題 2 記述的研究篇』, 明治書院, 167-209.／同（1989）「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻（上)』明治書院, 178-205.／上野監修（2010）『日本語研究の 12 章』明治書院.／同(2010）「与那国方言のアクセントと世代間変化」上野善道監修（2010）, 504-515.／同(2012）「N 型アクセントとは何か」『音声研究』 16（1), 44-62.／新田哲夫（2012）「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』16（1), 63-79.／同（2013)「越前海岸の N 型アクセント」『第 27 回日本音声学会全国大会予稿集』19-22. ／新田哲夫・松倉昂平（2015)「福井平野周辺地域の三型アクセント」『第 29 回日本音声学会全国大会予稿集』16-21.／平山輝男・中本正智（1964）『琉球与那国方言の研究』東京堂.／広戸惇・大原孝道（1953）『山陰地方のアクセント』報光社.／松倉昂平（2014a）「福井県あわら市のアクセント分布」『東京大学言語学論集』35, 141-154.／同（2014b）「福井平野周辺地域におけるアクセントの周圏分布」『日本言語学会第 149 回大会予稿集』432-437.／松森晶子（2010）「多良間島の 3 型アクセントと『系列別語彙』」上野善道監修（2010）, 490-503.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 松倉昂平・新田哲夫	４．巻 20-3
２．論文標題 福井三型アクセントの共時的特性の対照	５．発行年 2016年
３．雑誌名 音声研究	６．最初と最後の頁 81-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 松倉昂平・新田哲夫	４．巻 1
２．論文標題 福井三型アクセント資料集	５．発行年 2020年
３．雑誌名 科研費報告書	６．最初と最後の頁 1-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 新田哲夫
２．発表標題 南琉球多良間方言アクセントのアクセント低核
３．学会等名 国立国語研究所共同プロジェクト発表会会（琉球大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 新田哲夫
２．発表標題 南琉球多良間方言アクセントの下降と上昇
３．学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」第2回合同研究発表会
４．発表年 2018年

１．発表者名 新田哲夫
２．発表標題 南琉球多良間方言のアクセントの弁別特徴と名詞句のアクセント
３．学会等名 第159回日本言語学会大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	松倉　昂平 (MATSUKURA Kohei)		